

第3回 内湖再生ビジョン検討委員会 議事概要

日 時 平成24年7月31日(火) 14時00分～16時40分

場 所 滋賀県庁北新館 5階 5-B会議室

出席者

(委員)

安藤 元一	東京農業大学 教授、ラムサールセンター 会長
西野 麻知子	びわこ成蹊スポーツ大学 教授
中川 一	京都大学 教授
細谷 和海	近畿大学 教授
佐野 静代	同志社大学 准教授

議 題

- (1) 前回までの検討の概要について
- (2) 詳細調査の実施内容について
- (3) 今後の内湖再生ビジョンの進め方について
- (4) その他

議事概要

(1)事務局挨拶

(2) 委員会設置要綱の改正について

(事務局)

第3回検討委員会以降は、オブザーバーを置き、オブザーバーは関係省庁として、国土交通省近畿地方整備局琵琶湖河川事務所、環境省近畿地方環境事務所、(独)水資源機構琵琶湖開発総合管理所とする。これについては、「琵琶湖全域における内湖再生ビジョン検討委員会設置要綱」の7条に追加している。

また、第3回検討委員会以降、委員会を公開とする。

(3) 前回までの検討の概要について(資料-1、資料-2)

(委員)

今回の内湖再生ビジョンでは、個別の内湖まで対象とするのか。

(事務局)

地域や各内湖の現状や課題等を整理した上で、これに基づいた内湖再生の全体的および地域毎の方向性について検討したい。検討の中では、個別内湖の調査データを整理していくが、ビジョンは全体的なものを対象とすることを考えている。

(委員)

p.12の水質環境について、内湖の位置を番号で示しているが、水質特性などで色分けして示した方がわかりやすいと思う。内湖毎に水質が異なっており、一口で内湖の水質特性を示すのは本当に難しく、どのように内湖の水質を表したらいいか非常に難しいが、例えば富栄養化を表す項目などを用いて、いくら以上などとして分類し示すと分かりやすいと思う。

(委員)

クロロフィル量がそれぞれの内湖の富栄養化の指標になると思うので、示してもらえたらよいと思う。ちょっと古いけど、クロロフィル量のデータはあったと思う。

(委員)

内湖の水質と合わせて琵琶湖の地先水質を入れて頂いているのですがごくわかりやすいが、内湖の水質データは全て揃っておらず、データの欠測状況がぱっと見た時にわかりにくい。どこが欠測しているか分かるような工夫をして頂くと分かりやすいと思う。

(事務局)

ご指摘を踏まえ、示し方を工夫する。また、データを確認し、追加して整理する。

(委員)

p.5の琵琶湖及び内湖の変遷について、左図と右図の違いがわかりにくい。左図が新しい情報であるので、こちらだけを示せばよいと思う。また、右下の面積の変遷図については、内湖の水域面積の変化を文章で書き加えた方が分かりやすいと思う。

(事務局)

ご指摘を踏まえ、表現の修正・追加を行う。

(委員)

p.7の社会環境について、平成19年の琵琶湖の自然湖岸データを追加整理し、湖岸分類に違いがあるため単純に比較することができないという注釈を加えてあるが、詳しい違いについて捕捉説明を追加した方が分かりやすいと思う。

(委員)

琵琶湖及び内湖のヨシ帯面積の推移が記載されているが、p.5に示してある水域面積の変遷との繋がりも含めて、少し捕捉して頂けたらと思う。

(事務局)

補足説明を追加する。

(委員)

p.9の現在の内湖環境の利用の状況について、前回よりかなり詳しくして頂いているのでとてもいいかと思う。問題がある箇所が残っているという点で、ヨシの産業利用という項目があるが、定義を明確にしないと、例えば 印が、過去は利用が確認され、現在は利用が見られないものということであるが、過去がいつまでの過去か、例えば昭和何年以降というふうに限らないと、江戸時代まで入れたら、全部の内湖が対象となる。また、産業利用という言葉について、自給用のものと、産業といった場合は商品的に他地域に出すイメージで自給を超える意味かと思うが、自給という意味であれば、これもほとんどの内湖が入ってくるし、その言葉の定義と今ここで必要な情報がどこまでのレベルかということ整理して頂いたほうが確実かと思う。

(事務局)

定義を明確にした上で再度整理を行う。(事務局)

(委員)

p.6の内湖の有する機能について、私自身も迷うところであるが、機能という言葉について当然特筆すべきであるが、10に及ぶ各項目の中に一つ一つ機能を設けることに少し冗長性があるのではないかと感じる。機能は非常に便利な言葉ではあるが、タイトルだけを機能にするという手もある。ただし、用語として 委員がおっしゃったように のところにはたして「産業

機能」なる言葉があるのかどうか、選別をするためにヨシの産業利用について、委員のご指摘とすり合わせをしておく必要があるかと思う。一つ一つ機能にこだわるのが、違和感とつかないか不整合があって、少しキャッチフレーズを整理したほうがいいのではないかという感じがする。

(委員)

改善していただいた、だが、非常に工夫されてよいかと思うが、との位置関係を入れ替えることができないか。の景観機能はどちらかという物理化学的な自然現象を受けての結果で、文化機能となるとそれ以下のレクリエーション・学習という社会的な要素のほうが強くなるから、並びとしても、居心地がいいのではないかという感じがする。その辺は事務局にお任せする。

(事務局)

ご指摘を踏まえ、表現の修正・追加を行う。

(委員)

内湖再生ビジョンであるから、なぜ内湖に注目するのか、これだけの手間暇をかけて内湖を考えるのかというところを最初にアピールした方がよいと思う。例えば p.10 にて、貴重種の分布、地域別、生息場所別を見れば、内湖は大切であり、貴重種は大部分が内湖にある。そういう風なイメージでとらえる事ができる。景観という意味でも本来の琵琶湖の湖岸の原風景的なものが残されており、内湖というのはそういうコアになるべきポテンシャルを持った場所であると思う。それらより、内湖保全に着目する必要があるというあたりをもう少し前に押し出していただいていいと感じる。

(委員)

消失内湖についても記載があるが、この内湖再生ビジョンの中でどのように考えていくのか。早崎内湖のように消失したものをまた復活させるという可能性はあるのか。それとも今ある内湖についての再生ビジョンとしてまとめていくのか。

(事務局)

早崎内湖は事業として進めており、内湖再生全体ビジョンの中に盛り込む予定である。それ以外の消失内湖については、現在干拓地等の他の用途で使われており、内湖として復元するという動きが盛り上がってきた時に活かせるような内湖再生全体ビジョンとしてまとめていきたい。

(委員)

p.8 の社会環境について、滋賀県だけでなく、地域別の人口予測も整理しているが、それぞれの内湖をどう保全していくかを考えると、これでもまだ非常にラフではないかと思う。内湖に直接関わるところ、その本当にローカルな地域について、例えば高齢化がどういうふうに進ん

でいるのかというようなところ、この内湖の保全と人口との関わり合いで考えると、もうちょっとその細かい範囲が欲しいと感じる。高齢化率がずっと右肩上がりということはわかるが、この数字だけ見てもあまり危機感がない。例えばその内湖の近くの集落で働ける年齢層の人がどれ位いるのかといったより具体的な情報があれば、危機感というのもわいてくるのではないかと感じた。

(事務局)

地域ニーズのアンケート調査を行う際に、ご指摘の情報についても出来る限り把握できるような調査を行っていきたい。

(委員)

p.12の水質環境について、水質値が「高い」または「低い」と記載しているが、水質が「良い」または「悪い」ということを記載して欲しい。BODは高いほうが悪いが、透明度は数字が大きければ良いことになる。その辺の細かいところについて補足していただきたい。

(事務局)

ご指摘を踏まえ、表現の修正・追加を行う。

(委員)

琵琶湖の面積のわずか0.6%程度しかない内湖に、琵琶湖の周りのヨシ帯の6割近くが現在でも分布しているというのが、内湖の一番大きな特徴である。植物について、いわゆる湿地性植物、汎濫原性植物で、雨が降ると水位が上がって冠水し、時々つかる。いつもはちょっと水の上において、時々つかるような、湿地性の植物が多い。魚もヨシ帯を利用し、ヨシ帯に卵を産み、ヨシ帯をエサ場にするものが多い。生物的な観点でいくと内湖というのは、ヨシ帯が非常に豊かだということに尽きるのではないかと思う。そこを全面に押し出して、内湖というのは、琵琶湖のわずか0.6%程度しかない水面に琵琶湖にあるヨシ帯の6割近くがあるということ、p.5の水域面積とp.10のヨシ帯の面積を重ね合わせるなどして強調されたいのではないかと思う。内湖の景観についてもやはりヨシ帯であり、非常に水域面積は小さいが、そこにヨシ帯が沢山あるということを出していけばいいと思う。

(委員)

今の委員のご指摘は文化や人間とのつながりと同じで、ヨシ帯があってそこに魚が来るという生物との関係があるからこそ、資源として利用する人間活動の舞台になる。琵琶湖本体は深すぎて、例えば戦前の漁業では深いところでの技術はないので、結局内湖が資源豊かな漁場ということになり、そこで鮎鮪の文化が出てくるということで、生物面と文化面は必ずリンクして連携してくる。委員がおっしゃった方向性に私も賛成である。

(委員)

私個人は委員と委員の意見と全く同一である。そもそも内湖再生プロジェクトにつ

いて、委員が言われたように、琵琶湖と人との関係を築くという点では、本湖と人とのかわりが非常に少ないが、内湖こそ人と自然の営みが実にうまくバランスとれた、人と自然の共生の一つのモデルであるということ強調すれば、唐突感はなく、私たちがこれまで、自然を軽視してきた反省として、内湖にこそ、私たちが理想とする原風景があるという一つのコンセンサスを最初に出せば、内湖の位置付けというのはおのずと明確になってくるのではないかと思う。

(委員)

各委員の意見は同じ方向を向いている。内湖の生態系価値、景観価値、人との関わりにおける価値、そういうことを持った琵琶湖の中でも3つの点におけるホットスポットであり、内湖というのは琵琶湖の中でも守らなければならないところだという方向に出来るだけまとめようと思う。

(委員)

何度も言っているが、内湖と琵琶湖は違う。琵琶湖というのは風が強く、波がきつく、自然の荒々しさがあると思う。自然の荒々しさと対照的に、やさしいというか、人が近づくことができ、ヨシがあって、穏やかであまり波がなくて、水質はあまり良くないなどという内湖を強調すると同時に、琵琶湖との違いみたいなものを際立たせると内湖のいい所が見えてくると思う。琵琶湖とはちょっと違う荒々しい自然じゃない、穏やかな自然、穏やかな湿地帯というものを琵琶湖とのコントラストで強調されていくといいと思う。

(委員)

マザーレイク 21 計画の学術委員会では出ていた言葉だと思うが、二次的自然や里山にちょっと近いような、人とのつながりがある空間という意味で、いわゆる本湖とは違う、里湖という概念をイメージできるようなものを、特に一般の方には説明が不可欠ではないかと思う。

(4) 詳細調査の実施内容について(資料 - 3)

(委員)

詳細調査が今後内湖再生全体ビジョンのどこにどういうふうに使われるのかというのが、全然見えてこない。資料1の2ページに全体のビジョン構成に1から9まであるが、第4回検討委員会に向けて、再生手法の整理や関連性との整理を次回にやらないといけない。例えば、内湖再生の手法、それから推進方策、内湖再生の課題とか4までは、全体ビジョンの今までの説明でかなり見えているかと思うが、5以降が、今までの資料の中では見えていない。ベースになるデータが必要だから、とりまとめているというのはよくわかるが、それを限られた時間の中で進めていく時に、この5以降の作業はいつ誰がどこでやるのかと、そのベースの現況調査ばかりやっていて、その先進む時間があるのかというのが私の一番の疑問である。

(委員)

p.4 について、現況台帳案とあるが、あまりにも表層的な項目に見える。まず、一番の問題が

これは現況台帳であり、過去のことは書いてない。将来いかにあるべきかということも書かれてない。方向性については、地元の意向が別にあるのかもわからないが、将来に向けたビジョンというのは、現況の今の時点だけということだけではちょっと不十分だと思う。例えば琵琶湖とのつながりが河川を経て繋がっている、それだけで、内湖の再生にどれだけ役に立つのか、あまりにも表層的なことではないか。特にそれぞれの内湖について、例えば内湖の奥の水路等にはたくさん生物がいる、琵琶湖と内湖の繋がりはあるけども川が非常に浅いから繋がりがすぐ切れてしまうような環境であるとか、そういういきいき感がなく、この例の書き込んだ項目を見て、この項目が役に立つのか、非常に私はこれを危惧している。

(事務局)

その部分でご意見を頂きたいと思う。これまでの調査、あるいは文献調査等で明らかになった部分を基にして、今後の、具体的に現実にビジョンとして書き込んでいくという作業を次回以降と認識しているが、その時に、特に今回ご意見を頂くものが、連続性の調査、地域の関わりという点で不足しているということが、今までのご意見の中の課題だと認識している。その時に、ここに見える部分は表面的で現況の部分でしか見えないかもしれないが、地域のニーズの調査であるとか、これは単なるアンケート調査ではなくて、個別にヒアリングなども行っていくので、そういうところで、過去の部分も含めて、十分に厚みを持たせた形でこのビジョンが実際に実効性があるようになるものとしてまとめていきたい。次回の委員会までに具体的なこのビジョンの中身については、十分に委員の皆様方に議論いただいたものとして、一旦素案としてまとめさせていただくというふうに考えている。

(委員)

地域ニーズがかなり重要な調査になると思う。私なりの理解として、再生目標の設定のための情報集め、それから生態系修復に活かすために過去の聞き取りをする。過去の現象がこの内容ではそれに直結せず、非常に表面的な調査になっている部分がある。地域ニーズの特に過去の聞き取りの中身に関しては、これはアンケートだけでなく、聞き取りにするのであればなおさらそれにつながるような情報を得られるように、中身の議論を後でさせていただいたら、と思う。

(委員)

p.14 の地域ニーズ調査について、実際の調査内容というのは、漁業利用調査と地域ニーズ調査であるが、地域ニーズは漁業と地域だけではなく、かつての農業利用実態調査は絶対不可欠だと思う。だから、漁業利用調査もそうであるが、農業利用調査、地域ニーズ調査については、私自身だったら社会利用調査に絞り込んで、相互にヒアリングし、情報収集すると思う。今のここでは、ごちゃごちゃ感がある。

(委員)

p.5、6 の水位、生物移動経路の連続性調査について、どちらかと言えば、文献調査や簡易調査にしても状況証拠的なところが多い。すなわち、ここで重要なことは内湖と本湖をつなぐ水

路における最小落差、つまり魚属移動は可能なかどうかにつきると思う。水位もあるが、その落差の調査を行わないと役に立つかわからない。これは具体的な内容であるが、実効性のある方向に変えて欲しい。

(事務局)

落差の部分についても、今回の調査内容と考えている。

(委員)

地域の住民に今の内湖をどういうふうに保全していきたいですかと聞いたときに、例えば魚類多様性のホットスポットとしての価値を十分に認識していないので、内湖をどれだけ大事だと思いますかと聞いても仕方がない。こういうふうにくこの内湖はホットスポットだからどうしたらいいと思いますかという聞き方だったら正しい。いきなり今の状態で聞かれても、今の内湖の機能や意味をちゃんと理解されている方がいるか疑問である。地域の啓発活動に必要なパートかなと思う。

(事務局)

その通りだと思う。先ほど申し上げたのは、一般的に内湖が大事だということに関して議論を挟む方がおられないと思うが、現実には失われていっているということに関して、それをどう捉えるのかということが大事であると思っている。

(委員)

今後の議論の活用の方角性についても、地元の人にどうすればいいですかということの方角性なしにやったら、昔と同じように内湖があってくれたらそれでいいですよというような、特に内湖について常に考えてられない方にいきなり聞いても現状維持でいいのではという意見がくる。内湖再生ビジョンということでこういうふうを持って行きたいというような、役に立つ住民意見を汲み上げられるか、その辺りを危惧する。

(委員)

ヒアリングをする時に情報提供をどこまでするのかということだと思う。ある程度情報提供をしないと、地域の方は重要性の認識がない。内湖の価値は住んでいる人は多分知らない。そこにいと見えないけれども、外から見るとよく見える。内湖の価値をある程度お伝し、情報提供すると、情報提供する前とする後で、反応が変わると思う。

(委員)

移動経路の調査の時に、琵琶湖との分断についてどういう形にすれば解消できるのかというような視点で調査をしないと、ただこういうのが分断されていましてだと、あまり意味がない。分断がどういう状況で起こっていて、どういうふうにしたら解消が可能かという視点での調査をした方がよい。

(委員)

ヒアリングについては、時間軸の話を入れて頂きたいと思う。今どれだけ利用しているかという話は書いてあるが、いつから利用しはじめたかという情報が全くない。その人がいつから利用を始めたか、その利用の経過はどう変わっていったのか、最初から変わらなかったのかという時系列の情報っていうのをもうちょっと整理をして、入れていただけたらと思う。実際にヒアリングされたらわかると思うが、昭和10年代とか20年代とかピンと来ない。時代のエポックを入れて、戦後すぐなどみんなが共通して経験されているようなものを一つの目安にして見ると10年代20年代っていうのは、こんな時期ですという形で書かないとたぶん意見が出てこないと思う。

(委員)

内湖っていうのは川でいうと、ワンドとかそういうのによく似ていると思う。ワンドで問題になっているのは、やはり水質で本川とワンドとの水の交換が重要になってくるが、この調査項目では内湖において、川や水路で繋がっているかどうかだけのことである。これが内湖にとって、繋がっていた場合にはどれくらいの水が入ってきて、どれくらいの回転率、平均流量、あるいは雨が降ったら最大流量がどれくらいなのか。そしたら、内湖をもう少し良くしようとするには、その調査の結果に対して今後こういうことが必要だというような、その後につながる調査にしたほうがよいと思う。繋がっていない場合は地形的に見てつながっていないのか、地下では地下水と実は連動していて、琵琶湖の水位が減ってきたら地下水として入ってきて、交換になり、そういうのがつながりになる。地形的に見てぱっと見てこうだというのではなく、もう少し琵琶湖とのつながりを見る上では調べていただきたいと思う。地下水の関係なんかを見ていくと大変であるが、見ていただいたらいいのではないかなと思う。

(委員)

内湖の治水機能について、全体ビジョンの構成の中で治水のことを書くなら、それなりの証拠があると思う。どれくらいの治水の機能があるのかと、その核に至るデータをもっているのかどうかである。感覚的に、洪水調節をするような機能があるのはわかるが、ちゃんと治水機能と書けるデータを持っているかどうかによると思う。

(委員)

治水機能について数値的なデータはないが、西の湖が例としてある。昭和40年くらいに大中の湖が干拓されたが、西の湖があったので周りが浸水をしなかった。それで西の湖については干拓するつもりであったが、残そうという話になった経緯があり、それで治水機能というのが認識された歴史的な経緯がある。

(委員)

内湖に治水機能があるのは知っているが、33の内湖の全部というと、話が別になってくると思う。

(委員)

琵琶湖全体の0.6%程度の水域面積しかない内湖に多くのヨシが存在し、そういったことが景観や文化、人とのつながりに重要であるというのは、委員会では認識すると思う。しかし、住民の方がそれで、内湖再生に協力しようというインセンティブがわくかどうかということである。そこのところをもう少し、ニーズを探るといふか、協力しようというような材料を出す必要がある。要するに事前レク等をやってから、アンケートするなりしないと、住民としては、ニーズからいって大事なのがわかるが、ちょっとやっぱり協力できない、田んぼを持っていると水をまわさないといけないし、埋めてしまって宅地にしたいなとか、いろんなこと出てくると思う。そういうものに勝るインセンティブを出す必要があるのかなというふうに思う。

(委員)

今のインセンティブというのはすごく大事なことだと思う。一つの事例としてラムサール登録湿地条約がある。その時にまず環境省に打診された時に普通返ってくるのは、どんな見返りがあるのかというものであるが、そんなものはない。では、今までラムサール登録して何が良かったかというのと、その辺のふつうの水たまりだと思っていたものが、生態的にも歴史的にもかけがえのない宝が地元にあるのだと、それに気付くことが結局ラムサール登録することの意味だったのかなというふうに思う。生態的に重要であるっていうことを地元で理解してもらった中で、琵琶湖全体を含めた、全生態系を保全するためのホットスポットとなる宝を自分たちが持っているのだと、私たちが琵琶湖・淀川水系の生態系を守っているのだという、そういうことに気付いていただく。それが、内湖再生という意味なのかなと考えている。

(事務局)

委員がおっしゃった、自分たちが宝を持っていることに気づくというところが、インセンティブになると思う。先ほど議論に出た消失内湖について、例えば入江内湖は、現在クリークみたいになっており、そこに地域の方がもっと近づけるようにしたいという事例がある。消失した内湖でもクリークとして残っているような場所では、基本的にこの内湖再生ビジョンで示している方向性は活用していけると思う。今回の調査は、現存内湖と新規内湖を中心に調査しているが、消失内湖が、現在小水湖やクリークなどとして残っているという事例等があれば本文中に反映させ、消失内湖に活用できればと考えている。

(5) 今後の内湖再生ビジョンの進め方について(資料-4)

(委員)

これだけタイトな中で、しかも今まったく資料として挙がっていないような項目もある。例えば、資料1のp.2で、琵琶湖全域における内湖再生全体ビジョン構成(案)があるが、現状を把握するということとはまがりなりにも進んできたが、内湖再生の手法とか推進方策とか、本来の内湖再生というところが、まだこの検討会で、その資料を前にして意見を頂くというふうな段階までまだない。これで間に合うのかなというところを非常に危惧する。

(委員)

あらゆることを内湖についてやるというよりは、内湖再生の資料1のp.3にある生物の生息環境を確保する、生物移動経路を確保する、そこから内湖再生をする。この基本的な視点に絞り込んだ形での作業をしていただいたほうが、意味のあるビジョンにすることができるのではないかと思う。先ほどの詳細調査の説明を頂いたが、膨大な作業量になると思うので、それをまとめて、このたった3ヵ月の間に、今の詳細調査をビジョンの土台として反映させていけるかという、調査は調査でやりましたと、それで終わってしまうのではないかという危惧を感じる。ひとつはそういうメリハリを利かせたまとめ方ということに舵をきっていただけたらどうかと思う。

(委員)

少なくとも10月中旬には資料1の内湖再生全体ビジョン構成(案)についてはすべてたたき台が出ているということが大前提である。それでもこれだけのことを次回の委員会で議論できるのか。たたき台が今まったく示されていないが、今たたき台はあるのか。

(事務局)

たたき台について、文章としてまとめたものはない。人とのつながりについて、今回の内湖再生ビジョンで非常に大きな意味を持つものであるが、大体の思いとしては持っている。それを現地調査やヒアリングで確認していく。それが、個々の内湖においてどのように、地元として思われているのかを確認するという作業を今後していく。たたき台については、素案的なものを9月の頭にまとめていく。10月中旬の第4回の検討委員会の際には、そこでたたき台を初めて委員の先生方に確認していただくのではなく、ビジョンの事務局案についてヒアリングの中でより煮詰めたものにし、第4回の検討委員会では、ほぼ完成形に持っていきたい。

(委員)

人とのつながりのところで、大体のものはあるというふうに伺ったが、そこがすごく難しくどうしようもないからこそ調査をするのであって、あるいは地域への金銭的なメリットに代わるメリットをどう出すとかいう、私にしたら苦しいところであると思う。出せないかもしれないことも前提に、やるだけやってみようという委員会だと理解していた。そのへんは、一応方策は思いついたと安心してよいのか。むしろそこですごい議論が起こってくると思っていた。

(事務局)

基本的な考え方という部分で、そういう課題の認識というはあるが、いわゆるたたき台として今すぐ出せるようなものはない。なので、詳細調査の結果や、個別に今後お話を伺う中で、なんとかこのスケジュールの中で案をまとめていきたいというのが今の事務局の考え方である。委員会の案として11月末を目途にという、あとパブコメ等のスケジュールに縛られてはいるが、このスケジュールの中で精一杯反映できるものを反映していきたいということで、ご了解いただきたい。

(委員)

そうすると資料1の2ページのビジョンの構成で、6.内湖再生の手法という項目があるが、これ以下はどういうふうなアプローチで取組まれるのか。

(事務局)

今のところ具体的なものはない。基本的には内湖再生全体ビジョンというのは、個々の内湖の個別の事情にまで踏み込むということではなく、結局今の地域のニーズとかどういう関わりがあるのかということが、次の段階としてある。そこに至るまでの今の現状、あるいは歴史的な背景とか色々な調査をしているが、そういうものをベースにして、具体的な内湖再生の手法といった場合には、今現在いるんなところでやられている、手法メニューとして挙げることを考えている。

(委員)

ランドデザインとしての目標があるわけである。現状はそれぞれの内湖ごとに、大きな目標に向かってとどういふような手法でその目標に向かっていくことができるのか、そういう選択肢を示すということが内湖再生ビジョンの中で、一番大事なことだと思う。そうでなければ、生態的な現状調査をやったのと、たいして変わらなくなってしまうので、その辺りのところは、力を入れていただきたい。

(委員)

この詳細調査の項目について、一生懸命やっていただいたのはよくわかるが、内湖をなんとかよくしていくという思いで満ち満ちた方がこれを作られたというイメージがあまり感じない。本当に役に立つ調査というのは、それぞれの項目を書く時に、これを書けば、こういうふうな時にこの項目は使ってもらえる、そういうイメージを持って、その一つ一つの項目を書き込んでいただくという発想がなければ、なかなか役に立つものはできないと思う。

(委員)

資料1の2ページの全体ビジョン構成というのは、メリハリをつけた成果を出そうという感じがしない。おそらく今後個別の内湖について対応するときに台帳みたいなものを作りたいと思うように思う。全体ビジョンというものと全体ビジョンの次に考えていることがごっちゃになっていて、私はよく理解できない。例えば、この全体ビジョン構成のストーリーだったらすぐ書けると思う。ただ、委員がおっしゃったように、メリハリをつけるとなるとそれぞれの章でアンバランスがでてくる。しかし、そこが大事と考えるのか、あるいは、全体ビジョンは大体でいいと事務局が考えているのか、そこを確認させて頂きたい。

(事務局)

事務局としては、メリハリをつけて絞り込む考えである。広げたものをどこに集約するかという意味で、水辺エコトーンマスタープランに基づいて、種の多用性を取り戻すための内湖再生をしていくのと、地域特性を踏まえて内湖の機能回復等を含めた多極分散型の内湖再生、ま

た、内湖本来の機能を再生し、琵琶湖や人とのつながりをつくる内湖づくり、ここの基本方針
ところに集約して、焦点をあててメリハリをきかせていくということをご理解頂きたい。

(6)その他

(事務局)

次回の検討委員会開催について、第4回検討委員会を10月16日の午後から、第5回検討委
員会を11月13日の午後から予定する。

以上